



平成30年度第2回新潟支部研修会が開催されました

平成30年10月6日（土）午後1時半より新潟大学医学部第1講義室にて平成30年度第2回新潟支部研修会が開催されました。

はじめに、ライフテクノロジーズジャパン株式会社の大藤 努先生から「ゲノム医療の実装に向けたプロトコル提案」を講演していただきました。ゲノムとは、DNAに含まれる遺伝情報全体を指しており、ゲノム情報は体をつくるための、いわば設計図のようなものです。それらを網羅的に調べ、その結果をもとにして、より効率的・効果的に病気の診断と治療などを行うのがゲノム医療です。近年ゲノム研究の目ざましい進歩により、病気と遺伝情報のかかわりが急速に明らかにされつつあります。

病院や検査センターで行われている、がん治療を目的とした遺伝子検査は、手術検体や生検などで採取された「がん細胞」の遺伝子異常を調べることを目的としています。



遺伝子異常の有無によって、治療効果や副作用を予測して薬を選択でき、患者さん一人ひとりに最適な治療法の選択（個別化医療）ができるようになります。

講演の中では、日本病理学会監修のゲノム診療用病理検体 FFPE 取り扱い規定を引用し、組織検体や組織標本を用いた、がんクリニカルシーケンス（遺伝子検査の流れ）の説明をしていただき、コンパニオン診断薬と体外診断用医薬品の診断プロセスにおける位置づけ、次世代シーケンサによる遺伝子パネル検査などもお話ししていただきました。

日常業務でも遺伝子検査を念頭に置いた、検体の取り扱いが重要になると再認識した講演でした。

次に、シスメックス株式会社の林 文明先生から「形態学検査の精度管理と標準化」について講演していただきました。今年度の新潟支部研修会は精度管理をシリーズ化し開催していますがその第2弾となります。そもそも精度管理とは何なのか？患者さんの検査結果が出るまでには、採血前から測定後に関わる種々の要因（検体・試薬・分析装置・人）が関わり、その全てに精密さ（測定値がばらついているか）と正確さ（測定値がどれくらい確かか）の両方が求められるのが理想です。血液像、尿沈渣、細胞診、グラム染色等顕微





鏡を使用するものも技師によって報告にばらつきがでないよう、たとえ当番業務でしか携わらないとしても技師同士のスキルや知識も同じにしないといけないと改めて感じました。

先回の生化学系に引き続き、血液形態学、尿沈渣、病理検査の精度管理を学ばせていただきましたが、講演後のフロアの質疑も非常に多くとても活発な研修会となりました。



次回の研修会は年明けの2月を予定しています。

精度管理シリーズは生理検査です。是非次も沢山の方に参加していただけたらと思います。

最後になりましたが、お忙しい中講師を引き受けて下さりました先生方にお礼申し上げます。ありがとうございました。また、当日参加していただいた皆様、実務委員の新潟支部幹事の皆様、お疲れ様でした。

文責 新潟県立がんセンター 豊崎
木戸病院 神林